

横浜市インフルエンザ流行情報 11号

横浜市衛生研究所 / 横浜市健康福祉局健康安全課

《トピックス》

【警報発令中】患者数の多い状態が続いています。

【概況】

2017年第5週(2017年1月30日～2月5日)の定点^{※1}あたりの患者報告数は、横浜市全体で **40.55** と、第4週の48.06からやや減少しましたが、依然として報告数が多い状態が続いています。

学級閉鎖等は第5週で126件の報告があり、第4週からやや減少しました。医療機関、高齢者施設内での集団発生の報告も続いており、外部からの持込み防止対策や職員及び入所者等の健康観察の強化が重要です。

また、入院患者の報告数は増え続けており、迅速キットの結果が把握されている事例はすべてA型でした(本文5参照)。1月以降インフルエンザ脳症が2件報告されており、重症化についても注意が必要です。

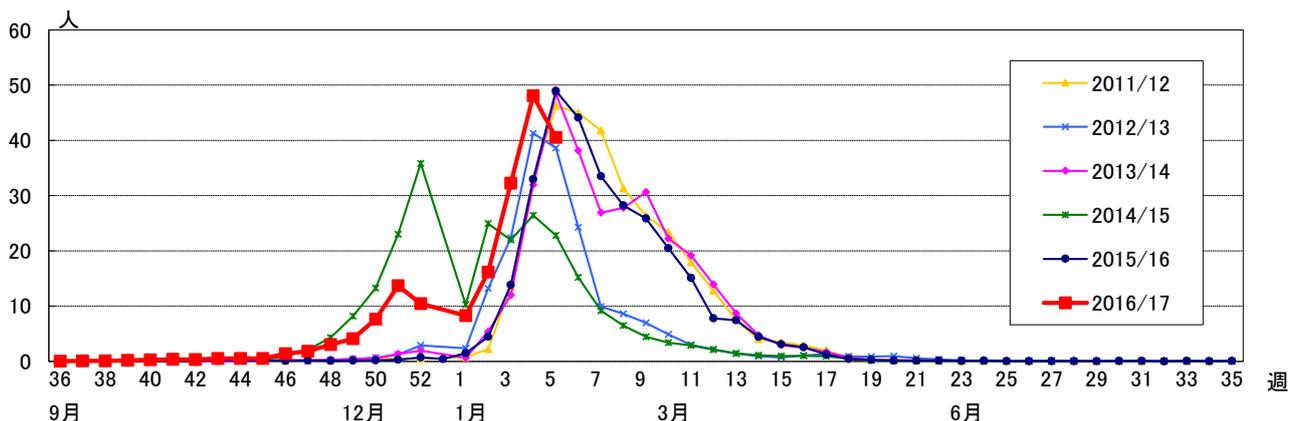
第5週の迅速診断キットの結果は **A型94.8%、B型5.1%、A・B型ともに陽性0.1%** となっています。市内のウイルス検出状況では、ほとんどが **AH3型(A香港型)** です(本文7参照)。

例年、流行警報は2月から3月まで続きます。引き続き、予防や早期受診などの対策^{※2}を心がけましょう。

※1 定点とは、定期的にインフルエンザ患者発生状況を報告していただいている医療機関(市内153か所)のことで、そこから報告された患者数の平均値が定点あたりの患者報告数です。

※2 [市民向けインフルエンザ予防チラシ\(横浜市\)](#)

1 市内流行状況:市全体の定点あたりの患者報告数は第5週で40.55となり、第4週の48.06からやや減少しました。第4週をピークとして漸減していく可能性があります、依然として報告数が多い状態が続いています。



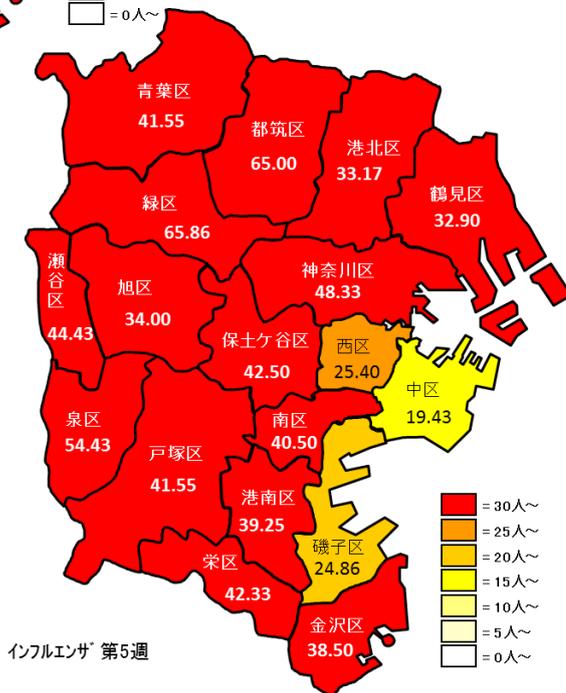
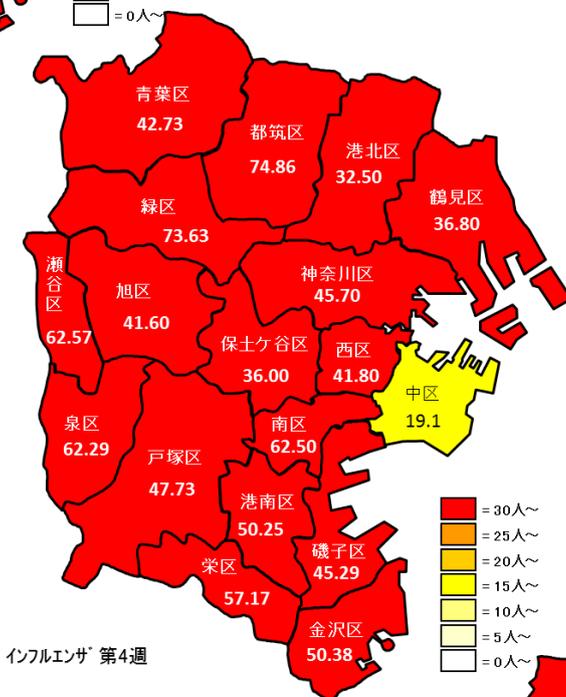
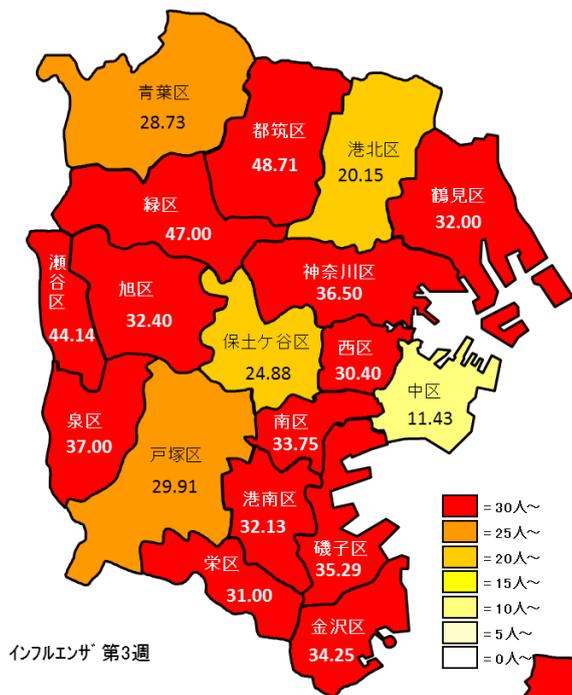
2 地図で表した直近 3 週間の区別流行状況(塗り分けの数字は定点あたり報告数)

2017 年第 3 週(1 月 16 日～22 日)に市全体で警報発令基準値(30.00)を上回りました。

第 3 週は 13 区で、第 4 週は 17 区で警報発令基準値を上回りましたが、第 5 週では 15 区となっています。

警報は解除基準値(10.00)を下回るまで続き、直近の 5 年間では、概ね 2 月中旬から 3 月下旬までの期間に解除されています。昨シーズンは第 4 週(1 月 25 日～31 日)で警報発令、第 12 週(3 月 21 日～27 日)で解除されています。

流行警報はまだ続きますので、ワクチンの接種の有無に関わらず、引き続き、手洗い等の予防策の徹底が重要です。



【参考リンク】

近隣自治体の流行状況

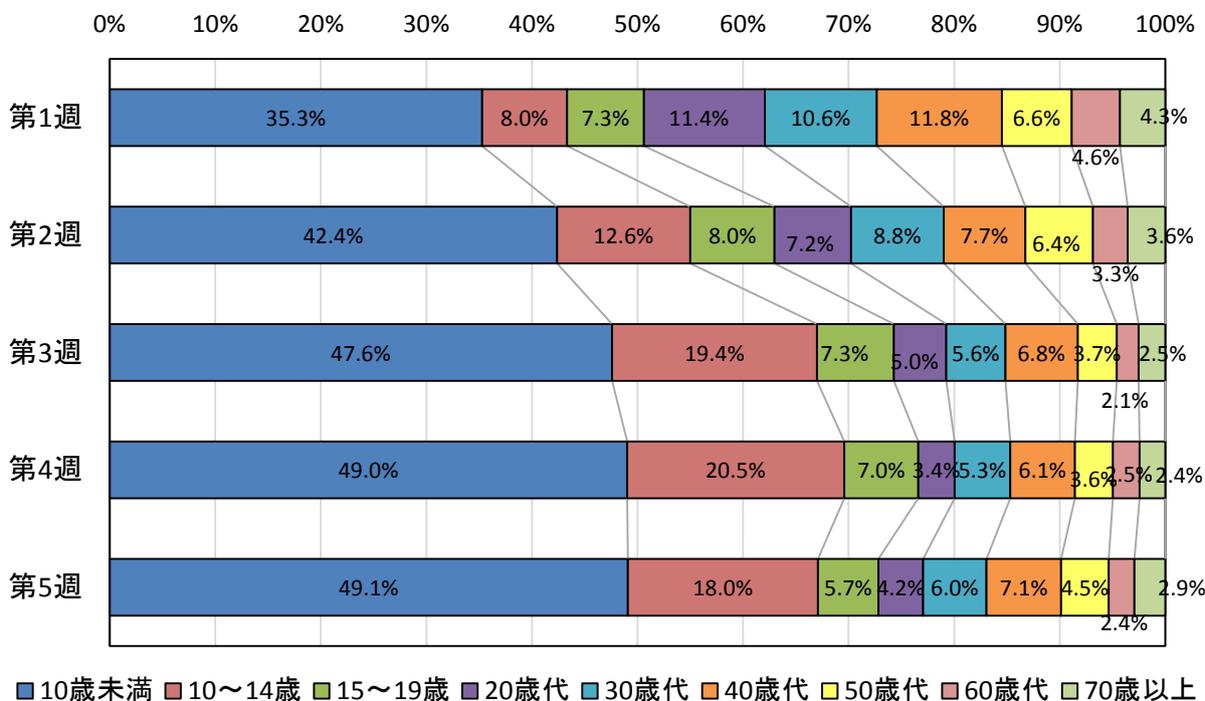
- [神奈川県](#)
- [川崎市](#)
- [東京都](#)

全国の流行状況

- [国立感染症研究所](#)

3 年齢層別集計:第5週の患者年齢構成は、10歳未満が全体の49.1%、10歳以上15歳未満が18.0%となっており、15歳未満が全体の約7割を占めています。学級閉鎖等の報告はやや減少していますが、依然として報告数が多い状態ですので、引き続き小学校や中学校での感染予防策の徹底が重要です。

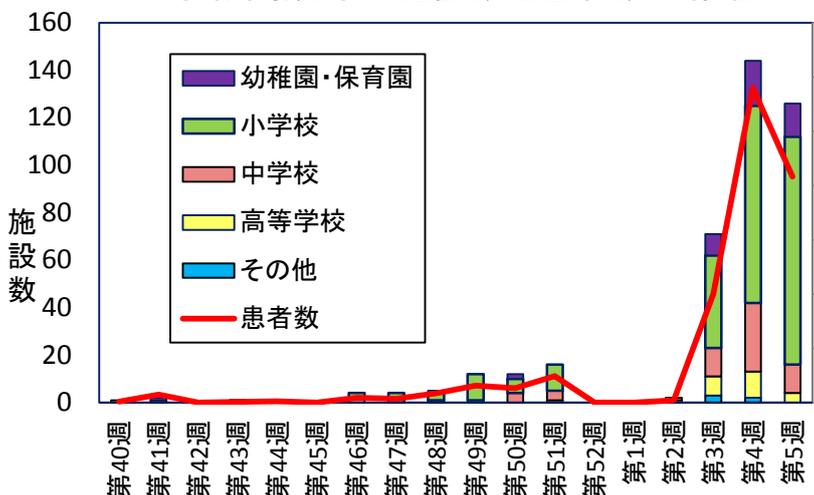
年齢層別患者割合



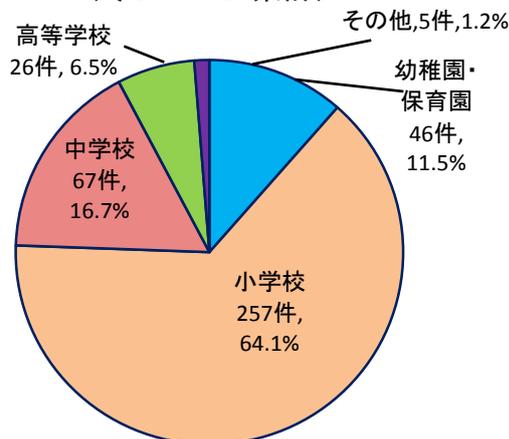
4 市内学級閉鎖等状況:第3週で71件、第4週で144件^{※3}、と報告数が増加していましたが、第5週で126件となり、やや減少しています。第5週の内訳は、幼稚園・保育園14件、小学校96件、中学校12件、高等学校4件でした。第5週で報告された患者数(医療機関で診断された人数とインフルエンザのような症状のある人数の合計)は2,082人で、第4週の2,899人よりやや減少していますが、引き続き、小・中学校でのまん延防止が重要です。

※3 追加報告があったため、流行情報10号から報告数が更新されています。

学級閉鎖等の施設数と患者数の推移



学級閉鎖等の施設の状況 (今シーズン累計)

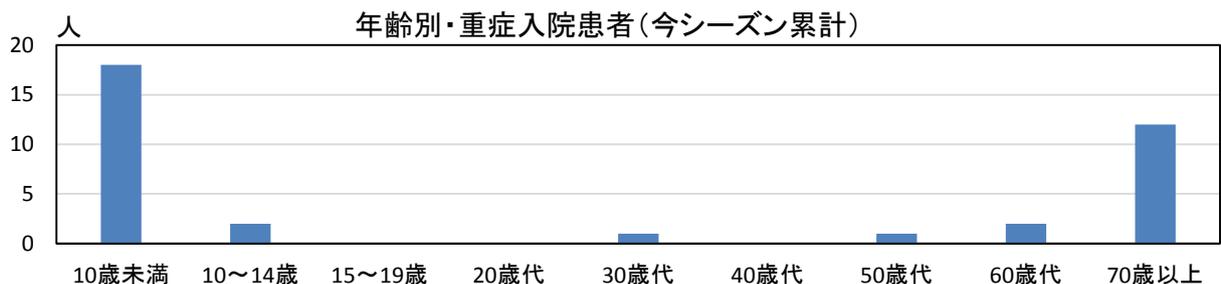
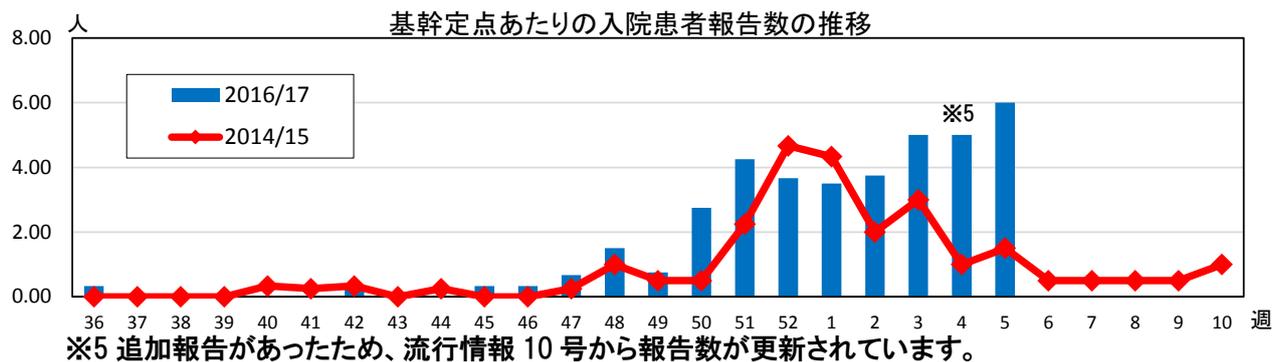


5 入院サーベイランス:市内基幹定点医療機関^{※4}あたりのインフルエンザ入院患者報告数は増加傾向にあり、第5週までの累計で141人となりました。うち、15歳未満が47人(33.3%)、70歳以上が64人(45.4%)となっており、小児と高齢者が多くを占めています。迅速キットの結果が把握されている事例はすべてA型でした。

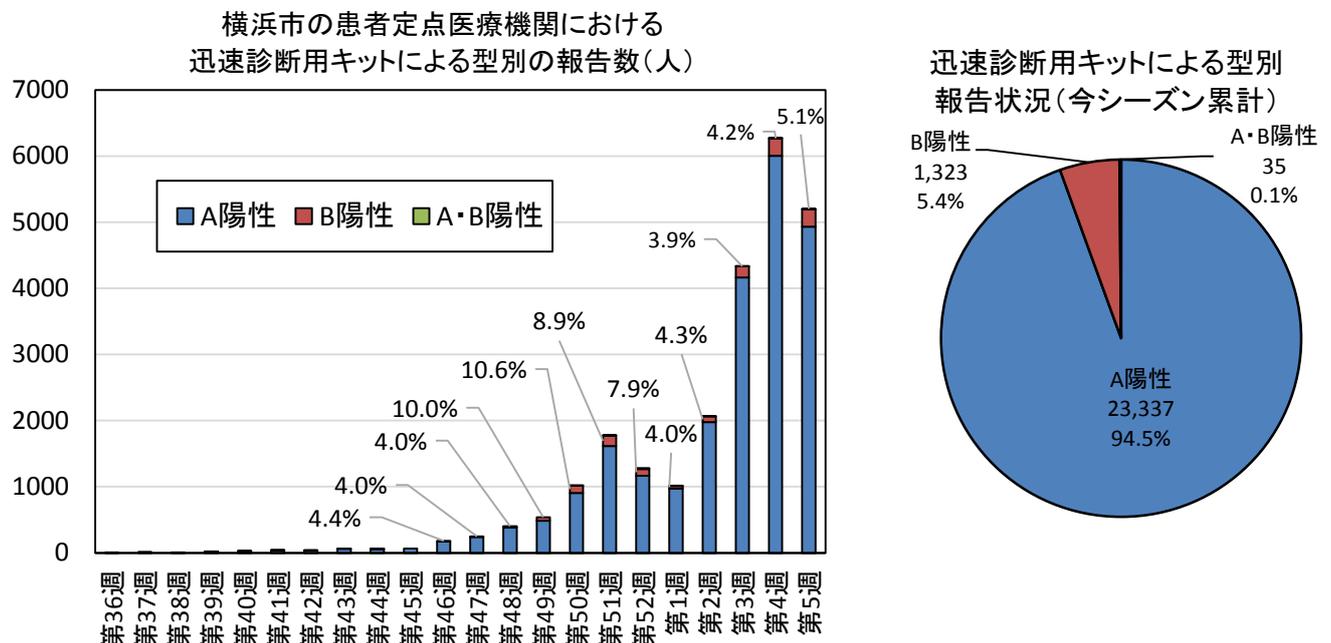
今シーズンと同じくAH3型(A香港型)が流行した2014/15シーズンと基幹定点あたり報告数を比較すると、今シーズンの方が多く、現在も増加傾向にあります。

入院時の診療内容が把握されている事例で、ICU入室、人工呼吸器の使用、頭部CT検査、脳波検査が実施された重症肺炎や脳炎が疑われる入院患者(以下、重症入院患者)は、特に小児と高齢者に多く報告されています。

※4 基幹定点:患者を300人以上収容する病院(小児科医療と内科医療を提供しているもの)の中から、地域ごとに指定された医療機関のことで、市内には4つの基幹定点があります。



6 迅速キット結果:今シーズンの迅速キットの結果の累計は、A型23,337件(94.5%)、B型1,323件(5.4%)、A・B型ともに陽性35件(0.1%)で、A型が多く検出されています。第5週の迅速診断キットの結果はA型4,936件(94.8%)、B型264件(5.1%)、A・B型ともに陽性5件(0.1%)となっています。

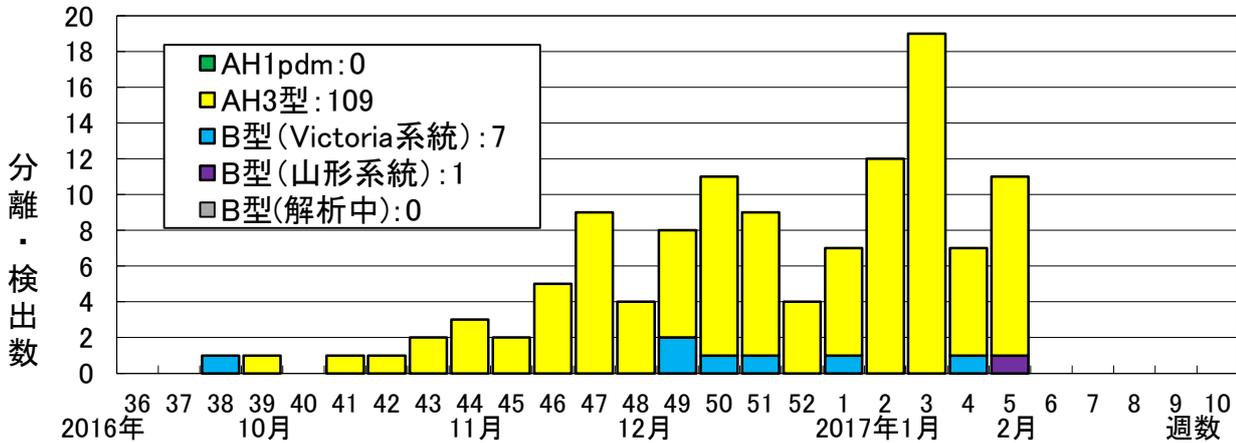


7 市内病原体検出状況:市内では病原体定点医療機関^{※6}から AH3 型が最も多く分離・検出されており、全国^{※7}と同様です。第 5 週で今シーズン初めて B 型(山形系統)が分離・検出されました。

※6 病原体定点:採取した検体を衛生研究所に送付する医療機関で、市内に 17 か所あります。うち、インフルエンザについては 12 か所にて採取されています。

※7 [インフルエンザウイルス分離・検出速報\(国立感染症研究所\)](#)

病原体定点からのインフルエンザ分離・検出状況(2017 年 2 月 7 日現在)



【参考】

市内で分離された AH3 株(細胞培養した 140 株)のワクチン株との抗原性解析(HI 試験)は、ウサギの血清を使っているため参考値ですが、すべて 8 倍以上でした。ワクチン類似とされているのは 4 倍以内であり、現在までに市内で分離された AH3 株については、ワクチン株と類似しているとは言えず、国立感染症研究所の結果と矛盾しない結果^{※8※9}と考えられます。

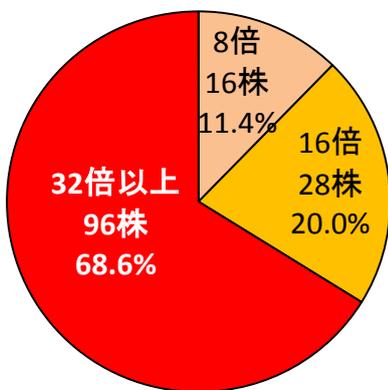
一方、市内で分離された B 型株(細胞培養した 12 株)については、すべて 4 倍以内でした。

※8 [インフルエンザウイルス流行株抗原性解析と遺伝子系統樹 2016 年 12 月 28 日\(国立感染症研究所\)](#)

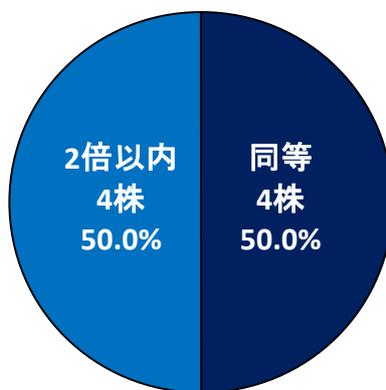
※9 [A\(H3N2\)亜型野外流行株の抗原性解析結果\(国立感染症研究所\)](#)

(参考値)市内で分離された株の抗原性解析(2017 年 2 月 7 日現在)

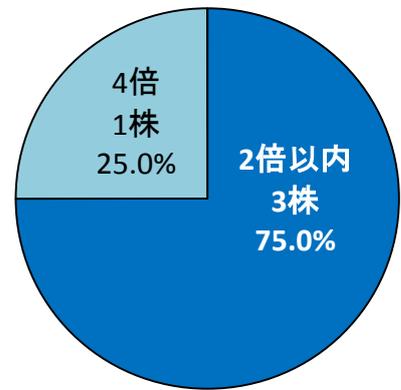
AH3 抗原性解析(140 株)



B ビクトリア系統抗原性解析(8 株)



B 山形系統抗原性解析(4 株)



■ 同等 ■ 2倍以内 ■ 4倍 ■ 8倍 ■ 16倍 ■ 32倍以上